

学科行事としての「七夕EVE」 —イベントの効果を考える—*

星野祐子**

1. はじめに

今年度も昨年度に引き続き、「七夕EVE」と題した七夕企画を実施した。この「七夕EVE」という名称は、昨年度の実施日が7月6日だったことから名づけられた。今年度は7月5日に実施したのだが、行事の愛称として定着させることをねらい、名称はあえて変更しなかった。

さて、「七夕EVE」は、表現文化学科の開設とともにスタートした。表現文化学科となり、文学科2専攻の体制であった時よりも、コースを超えて学生が交流する場面が多く見受けられるようになった。また、学科に所属する教員においてもそれは同様であり、「表現」や「文化」という大きな領域の中で、それぞれの教員が、互いの研究の重なりを活かした企画を考案しようとする雰囲気が生まれた。

そのような流れの中、昨年度は、着物文化を専門とするクリフと、留学生担当である星野が中心となり、留学生と日本人学生の交流の場として、七夕企画を実施することを発案した。先にも触れたが、その企画の実施日が7月6日であったことから、この七夕企画は、「七夕EVE」と名付けられた。

昨年度の「七夕EVE」は、実施日の1ヶ月ほど前の発案であったことから、行事としての完成度は決して高いものとは言えなかった。だが、留学生は浴衣を着用し、願い事を書いた短冊を笹に吊るし、日本人学生と共に七夕を楽しんだ。授業を浴衣で受けるという非日常的な経験も、日本人学生と留学生が交流するきっかけを創り出すにあたって効果的であったといえよう。

昨年度のこうした経験を踏まえ、表現文化学科の学生として1、2年生が揃う今年度は、行事としての完成度をより高めることを企図した。以下、今年度の「七夕EVE」について概要を示し、実施者個人の印象と学生の感想から、行事の効果を考える。

* TANABATA EVE as a Departmental Event: Considering the Results

** Yuko Hoshino 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科(Department of Culture and Communication)
キーワード：七夕 日本文化 学科行事 表現活動

2. 行事の概要

今年度の「七夕EVE」では、二つの企画を設けた。第一の企画は、ライティングクリエイターとのコラボ企画である。第二は、「七夕ウィーク」と題し、いくつかの授業で、七夕に関連する講義を行ったことである。今回のイベントは、外部のイベント会社と学科教員、さらには関係各所の協力を得て実施することができた。以下、それぞれの企画について概要を記す。

2.1 天の川制作—ライティングクリエイターとのコラボ企画

LEDライトを用いて、七夕の象徴である天の川を制作する活動は、一般社団法人キモノプロジェクトの協力を得た。同法人は、着物をはじめとする日本文化の継承・普及を促し、着物文化を現代的な感覚で捉える活動を行っている。また、各種イベントを手がけており、その一つに、ライティングイベントがある。七夕にちなんだ内容で、かつ、多くの学生が、授業の合間に随時「表現」活動ができることを考慮した結果、LEDライトを使った天の川作りが考案された。また、昼休みの時間帯は、ブラックライトに反応する「光るドリンク」(トニックウォーターをベースにした飲み物で、ブラックライトの下で発光する)を作り、七夕EVEの成功を祝うことを企画した。

当日は613教室をメイン会場として、天の川作りが始まった。白い風船に青色LEDライトを仕込み、空間に川のように浮かべることで天の川を表現する。天井に浮かぶ白い風船は、空調の効果もあり、ゆらゆらと揺れ、川の揺らめきを表現しているかのようだった。また、青色LEDの効果で青白く光り、幻想的な雰囲気 연출する。さらに、短冊には、ブラックライトに反応する塗料で願いを書くことで、教室の中に、それぞれが書いた願いが浮かび上がるよう工夫を施した。

七夕企画は、通常授業に実施するため、学科の学生全員で同時に作業をすることはできない。だが、学生は色とりどりの華やかな浴衣を身にまといながら、随時613教室を訪れ、それぞれの願いをしたためていった。ライトに照らされた学生の願い事は、とても明るく輝き、学生自身も、現代感覚で七夕を解釈することを楽しんでいたようだった。

また、幼稚園生や留学生別科の学生も訪れ、イベントを学科外に開いたことでの交流も見受けられた。

2.2 七夕授業について

学生は、幼稚園や小学校等で、七夕に関連した行事を経験している。しかし、七夕伝説やそのものについての理解は浅い。そこで、いくつかの講義で、「七夕ウィーク」と題した七夕授業を展開した。以下が、今回実施した七夕授業の一覧である。

表1のように、前週の6月28日から1週間、各教員の専門領域において、七夕関連の授業を実施した。

留学生授業、エッセイ入門、オーラルコミュニケーション、ライティングにおいては、七夕をモチーフにし、発信力を高める授業を企画した。民俗文化論においては、身近な行事として慣れ親しんできた七夕を、民俗学的な枠組みで解釈した。学生たちは、年中行事としての七夕

表1 七夕授業一覧

日時	授業名(担当)	テーマ	概要
6月28日	留学生授業 (星野祐子)	中国における七夕	出身地における七夕について発表。中国の地域性に富んだ七夕について理解を深めた。
7月1日	エッセイ入門 (小林実)	七夕のエッセイ	七夕にちなんだエッセイを自由に書く。読み手の注意をひくために最初の一文に注力。
7月2日	民俗文化論 表現文化論 (武田比呂男)	たなばたの話	たなばたの起源について理解し、宮中行事としての七夕と民間でなされる七夕との相違を知る。
7月3日	総合演習 (東聖子)	江戸の浮世絵における七夕	歳時記や浮世絵に、七夕関連の表現・絵を見つけ、江戸における七夕の捉え方を学ぶ。
7月5日	総合演習 (赤間恵都子)	平安時代の七夕と和歌	散文よりも韻文に、七夕をモチーフとした作品が多いことを学び、七夕の和歌を鑑賞。
7月5日	オーラルコミュニケーション (シーラ・クリフ)	七夕の朗読劇の作成	英語で七夕の物語を再現する。配役を決め、七夕の物語を演じる。
7月5日	ライティング (シーラ・クリフ)	七夕マンガの作成	与えられたフォーマットに合わせて、七夕のマンガを英語で作成する。
7月5日	毛筆書道 (鈴木滋子)	毛筆で短冊を書く	毛筆で短冊に願い事を書く。

の起源を学び、地域性が反映された七夕祭について理解を深めた。また、2年生を対象としている総合演習では、中古文学作品や近世の浮世絵において、七夕がどのように描かれているか、どのように受容されているかを学んだ。それぞれの時代における七夕を学ぶことで、学生はその時代の人々の感性に想いを馳せた。

このように、学科の教員が、七夕を意識した授業内容を組み込むことで、七夕EVEへの期待を高め、参加意欲を喚起することができたと考える。

3. 行事の効果を振り返る

七夕EVEの記録は、オープンキャンパスでも公開した。当日の様子を写真や動画で示し、七夕関連授業についても、授業内容と担当教員からのコメントを紹介した。本稿の末に、オープンキャンパスで展示した資料を掲載する。大判のポスター(星野作成)と七夕授業紹介(赤間作成)である。ぜひ、ご覧いただきたい。

最近、他大学でもキャンパスを浴衣で過ごすというイベントが流行っているようである。ただし、学科をあげて、七夕関連授業を展開するのは、本取り組みだけではないだろうか。また、ライティングクリエイターとイベントを創り上げることで、現代感覚で七夕を表現することができた。伝統行事としての七夕を学び、その上で、若い感性を活かして七夕を表現する。七夕をテーマに系統の異なる表現活動を実施できたのは、今年度の大きな収穫である。以下より、七夕EVEの行事を通して得られた学びの効果について、実施責任者としての所感を学生の交流という観点から記述する。

3.1 学生の交流

浴衣を着られない学生のために、当日の1限に、クリフの指導の下、浴衣を着用する時間を設定した。今年度は、一般社団法人キモノプロジェクトの女性着付け師2名にも、サポーターとして加わってもらった。この時間は、もともとは、浴衣を着るのが初めてとなる留学生のために設定した時間であったが、日本人学生にもその機会を開くことで、様々な効果が得られた。

まず、日本人学生と留学生との交流が見られた。表現文化学科に所属する留学生は、語学の授業以外は、日本人学生とほぼ同じカリキュラムを履修する。少人数教育でなされる1年次の基礎ゼミも、2年次の総合演習も、あえて留学生クラスを設けず、日本人学生と積極的に交流を図るようクラス分けを工夫した。

今回の七夕EVEにおいても、留学生と日本人学生が互いをニックネームで呼んだり、浴衣姿で共に写真に納まったりと、自然な形で交流がなされていた。言語ホストである日本人学生と言語ゲストである留学生の間には、通常、非対称的な関係が生まれる。日本語を教え、教わるという関係が、両者の間に心理的距離を生むこともある。しかし、浴衣着用のレッスンにおいては、日本人も留学生もスキルに大差はない。この状況がプラスとして働き、互いに浴衣着用を手伝い合ったり、浴衣を身にまとった姿を写真に納めたりと、浴衣を身に付けるプロセスを共に楽しむ姿をみることができた。また、浴衣や帯を実際に手にしながら、ジュスチャーを交えて会話を成立させていたようだった。抽象的な内容のテーマではなく、「イマ」「ココ」にある「モノ」（今回は浴衣や帯）について会話を交わすのは、初級の学習者であっても、それほど抵抗は感じないのだろう。あとで詳しく取り上げるが、「留学生と一緒に浴衣を着て話をしたのが楽しかった」という日本人学生の感想もあり、行事をきっかけに日本人学生と留学生の交流が促されたことがわかる。

また、今回は、クリフ担当の総合演習を履修している学生が、浴衣に不慣れな学生の着付けを手伝ってくれた。どちらかといえば大人しい印象を与える学生も、同級生や留学生、そして後輩に帯の作り方を指導していた。七夕EVEの企画の一部を「任されている」という責任感が、彼女たちの参加意識を高めたといえる。

3.2 学科を超えた交流

今回の七夕EVEは、浴衣を着用せずとも楽しめるイベントであることから、学科外に向けてイベントの周知を行った。学内にポスターを掲示すると共に、留学生別科、十文字幼稚園には、直接イベント参加を呼びかけた。別科にはポスター掲示と日本語担当教員への声かけを依頼し、十文字幼稚園には、保護者に対してのチラシ配布を依頼した。

当日、留学生別科からは、日本語クラスの授業において、別科生9名、教員3名の参加があった。浴衣着用の体験は時間の関係でできなかったが、短冊に願いを書き、ブラックライトに照らされる願い事を皆で眺めた。

十文字幼稚園からは、50名ほどの園児の参加があった。保護者の参加数を含めると100名以上の参加となる。降園時に合わせて、多くの園児の来場があったことから、613教室前は多くの人であふれた。その際、園児の短冊作成や入室の促しは、キモノプロジェクトのスタッフを中心にだったが、学生もサポートに加わった。短冊作成を手伝う者、光る風船を手渡す者、光

るドリンクを勧める者。こちらが特に指示をしなくても、各自が自らできることを考え、取り組んでいたようである。ある学生は、イベント終了後のアンケートに「幼稚園生のお世話をした。喜んでくれて良かった」と書いていた。おそらく積極的に幼稚園児との関わりを持った学生であろう。周りの状況を観察し、状況改善のために自分ができることを実行に移す。これは、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」の「主体性」や「実行力」に相当する。開かれたイベントにすることで、こうした学生の姿が見られたことは、今回のイベントの成果の一つとして捉えられる。

4. 学生アンケートから

イベント終了後に、簡単な無記名アンケートを取った。1、2年生の回答者数は92名であり、そのうち半数以上の52名が七夕EVEに参加したと回答した。ただ、今回の結果は、全員を対象にしたものではないため、実際の参加者数はこれを上回ることが想定される。2年生については、就職活動と重なったり、金曜日が授業日でない学生もいたりし、やむを得なく参加できなかった、という記述も見受けられた。留学生に対するアンケート結果は、別途扱う。

以下、日本人学生を対象にしたアンケートの中から、注目したい回答をいくつか取り上げ、行事の効果について述べる。なお、アンケートの内容および個別の回答については、クリフの論考が詳細に取り上げている。そちらを参照されたい。

表2 七夕EVE参加人数

	参加	不参加	回答者数（在籍者数）
1年生	32名	14名	46名（62名）
2年生	20名	26名	46名（74名）

4.1 イベントについて

キモノプロジェクトの企画のおかげで、伝統的行事である七夕を新しい感覚で楽しむことについて、学生は概ね好印象を抱いたようである。「斬新である」「新しくていいと思う」「面白い発想」「現代的」「今まで見たことのない演出」「行事を身近に感じる事ができた」「幻想的な雰囲気の教室ができて幼稚園の子どもたちも楽しめたと思う」などの感想がみられた。そして、「伝統を大切にすることも大切だと思うが、新しさがあつた方が「なんだろう」という感覚が生まれ、参加したいと思う」という感想には、まさにこちらが意図したこと、すなわち「伝統と新しさを感じる機会」として、七夕EVEを捉えていたことがうかがえる。ただ、教室が狭いことに加え、演出の関係で照明を落としていたことに抵抗を抱いた学生もいたようである。普段の教室と異なる空間を興味深いと思う学生もあれば、閉鎖的と感じる学生もいる。それは当然のことだろう。「広いところで行いたい」「教室が狭かったために長い時間いることができなかった」という感想も、今回の企画を実施するにあたって教室が手狭であったことを代弁している。

また、七夕イベントを通じて、表現文化学科としてのまとまりを感じた学生が多かったよう

である。「皆で楽しめた」「クラスの皆とも仲良くなれた」「表現文化学科らしいイベント」「授業で皆が浴衣だったので夏らしい良かった」「先生方も浴衣を着たのがよい」という感想がみられた。表現文化学科では6月に学科行事として歌舞伎鑑賞教室を実施しているが、学科の交流会というものは、今年度は七夕EVEが初になる。「先輩方や同輩、先生方と関われるのが良い」という感想からは、異学年交流の場が少ない、というより、十分異学年交流をするにあたっての時間がない短大生が、数少ない異学年交流の場として、七夕EVEの経験を捉えていることがわかった。

教員も浴衣を着用することで、行事を盛り上げることに貢献したといえよう。

4.2 七夕授業について

民俗文化論・表現文化論の授業で、七夕について改めて学んだことが印象深かったようである。学生の感想の中に、「『七夕』をなぜ『たなばた』と読むか気にしたことがなかったので新鮮でした」という回答があった。日頃、気にしていないこと、当たり前だと思っていることにも理由がある——そのことに気付くことはまさに学問の始まりである。学びに対する姿勢を醸成するにあたって、身近な行事である「七夕」は有効であったといえる。また、「文化の視点で七夕を捉えることは少ないので興味深かった」という回答からも、身近なモチーフを学問的に捉える活動に、学生は親しみを持っていることが推察される。「配布されたプリントを見て、アルタイル、ベガについて知りたくなった」という感想からは、授業をきっかけに、学生が自らの興味を拡げていることがうかがえる。なお、上記授業では視聴覚教材も活用され、「わかりやすかった」「七夕の起源が知れてよかった」という意見があった。

また、総合演習を履修している2年生のものであろう、「源氏物語にも七夕を楽しむ場面があることに驚きました」や「浮世絵の中から七夕らしいものを探すのが楽しかった。でも、ちょっと大変だった」という回答がみられた。浮世絵ゼミの成果は、図書館に展示することになっていたため、学生たちは、浮世絵の中に七夕の風景を探す活動に夢中になって取り組んでいたようだった。

そして、7月5日の授業は、学生も短大所属の教員も浴衣で過ごしたことから、「いつもと違う雰囲気を楽しんだ」という意見もみられた。非日常的な環境の中で、学科としての一体感を感じたようである。また、印象深い授業として、毛筆書道を挙げる学生もいた。浴衣を着て願い事を書くことを経験し、タイムスリップしたかのような心地で筆を走らせたのだろう。「とても古風な雰囲気が味わえた」という学生の声にも、浴衣姿で授業を受けるという非日常的な空間を楽しんでいた様子が見える。

4.3 今後に向けて

今回の七夕EVEは、クリフと星野が中心になって行事を進めた。昨年度と異なり、イベントが大きくなること、また業者と連携して行う初めての試みであることを考え、とりあえず教員主導で行うのがうまくいくだろうという判断であった。しかし、その準備段階において、次回の七夕EVEは学生主体で行いたい、という話は幾度となく出てきた。

そこで、アンケートの最後に今後の七夕EVEについての案を募った。

まず、企画段階からの学生参加をねらって「ポスターを公募にする」というものがあった。今年度もそのようなことを考えたが、準備期間が十分にとれず実現には至らなかった。しかし、学生作成のポスターは、イベントに対する期待や関心を盛り上げるにあたって、大きな効果を持つと考えられる。また、同じ学科の仲間が、学科行事を企画しているとなれば、行事自体の関心も高まるだろうし、何よりも学生が興味を持ちそうなイベントに仕立て上げることができるだろう。

当日の企画としては「七夕ゲーム」「ゆかたコンテスト」「縁日」のようなものが挙げられた。さらに、「浴衣を着なかった人はカメラマンになり皆を撮影」「甚平なら参加しやすいか」など、より多くの学生の参加を期待するような意見もあった。もちろん、七夕EVEへの参加は任意であるため、強制はできないが、浴衣を着ることに抵抗を持つ学生にとって、このような参加形態は気楽であると考えられる。「あまり大きな行事にすると参加にプレッシャーを感じる」「準備していなくても気楽に参加できることをもっとわかりやすく伝えたらよい」という意見からも、学生への参加は主体性に任せた方が無難であるといえる。

また、「浴衣でのマナーや着方を知る機会」という実用的な企画も意見として挙げられた。学科主体のイベントを外部に開くという観点では「他学科との交流」「お昼休みに幼稚園生と共同イベントをやる」などの意見が散見された。今回も交流がなかったわけではないが、それをより積極的な形で行いたい、ということだろう。

以上のような提案は、来年度において、実施の可能性を検討してもよいと考える。

その他、「授業を休講扱いにしてほしい」「サブアリーナなどの広いところをメイン会場にした方がいい」「食べ物や飲み物の充実」などの意見があった。これらの意見を取り入れるのは難しいが、学科イベントとして盛り上げたい、という学生の積極的な意欲が感じられる意見である。

最後に、1年生を対象に行った来年度の七夕EVEの参加意志について、その結果を示す。

表3 来年度の参加について

	ぜひ参加したい	時間があれば参加したい	わからない	参加したくない
今年度参加者	13名	16名	3名	0名
今年度不参加者	0名	9名	4名	1名

結果をみると、今年度参加した学生にとって、この企画は、概ね好評であったことがうかがえる。「ぜひ参加したい」と回答した学生は、全員が今年度の参加者であり、参加者における満足度の高さが示された。「時間があれば参加したい」と回答した学生は、参加者・不参加者合わせて25名であった。おそらく、就職活動や2年次の授業日を考慮しての回答であろう。

なお、「参加したくない」は1名であった。今後も「参加したくない」と回答する学生を無理に参加させることはしないが、イベント参加に消極的な学生がいることは、実施において留意すべきことである。

4.4 留学生の声

留学生にも日本人学生と同様のアンケートを実施した。在籍者14名のところ12名に実施し、7名が参加、5名が不参加という結果であった。日本語能力の関係もあり、自由記述の部分が十分でない学生が多かったが、印象深かった内容は、日本の文化の一つである浴衣が着られた点、日本人学生と交流ができた点の2点に集約できる。また、ある学生は、中国と日本の七夕について学んだことを興味深かったこととして挙げていた。日本であっても、中国であっても、七夕の捉え方が地域によって、あるいは世代によって異なっていることを、留学生同士で意見を交流させることで実感したようである。

今後に向けての意見として、学生組織である学友会主催の「七夕ティーパーティー」の参加を期待する声があった。「七夕ティーパーティー」は、本学科の七夕EVEと同日開催であったのだが、留学生の感想から推察するに、本学科の日本人学生の参加が芳しくなかったということだろう。

七夕EVEにおける日本人学生・留学生の交流が一時的なもので終わらないよう、今後の友人関係の展開に寄与する仕掛けを、継続して考える必要がある。

5. おわりに

今年は、首都圏にある大学において、「浴衣デー」と題した企画が様々に実施された。7月初旬は、Twitterでもそのような話題が飛び交っていたようである。七夕の日に、大学生が、日本文化の一つである浴衣に親しむ。それは、今年、一大ムーブメントともなっていた。

しかし、その多くはキャンパスを浴衣で過ごすといったものであり、その活動を学科の特色、学科の学びに結びつけているものではない。本学科の七夕EVEは、教員がそれぞれの専門領域を活かし、七夕にちなんだ学びを行う。そして、今年度は「文化」を「表現」というコンセプトで、天の川作りを行った。こうした取り組みは、本学科ならではのものとして、学内外に向けてアピールできるものである。

授業日数の確保の問題もあり、授業期間内において学科独自でイベントを実施することは、かなり難しい。だが、実施当日と学生のアンケートから判断するにあたって、行事としての七夕EVEは、ある程度成功したといえるだろう。以下、昨年度と比べて良かった点を、記述する。

一点目は、多くの教員の協力を得たことで、七夕関連授業が展開できた点である。今回は、七夕をモチーフにし、表現活動を展開する授業もあれば、七夕に関する知識を深める授業もあった。そのバランスも良かったと考えられる。

二点目は、ライティングクリエイターとのコラボレーションにより、新しい企画を実施できた点である。実施時間の都合により、学科に所属する学生が一同に会して作業をすることはできなかったが、天の川の一部に、自分の書いた短冊が浮かぶという光景は、なかなか見応えのあるものである。学科の学生を中心に、何かひとつの作品を作り上げるという経験も、学科の一体感を高めるのに効果的であった。

三点目は、学科の交流が促進されたことである。留学生と会話をする。異学年の学生と会話をする。「浴衣を着る」という同一経験が、心理的な距離を近づけ、自然な形で交流が行われた

ことがうかがわれる。交流という点では、幼稚園生や留学生別科生を招いた点も、学生のホスピタリティを涵養するにあたって意味があったと考える。

以上、今年度の七夕EVEについてその成果をまとめた。なお、本紀要では、今回の七夕EVEに関連した内容をいくつか掲載している。

■ オープンキャンパス展示物

資料1 「七夕イベント連携企画」

資料2 「表現文化学科 七夕EVE」

■ 授業報告

「JOINT CLASSROOM RESEARCH PROJECT TANABATA EVE / YUKATA DAY」
(Sheila Cliffe)

「近世浮世絵における七夕描写―演習の授業報告と図書館展示―」(東聖子)

■ 研究ノート

「平安文学における七夕」(赤間恵都子)

オープンキャンパス展示物は、夏のオープンキャンパスにおいて、展示したものである。授業報告は、それぞれの教員が七夕EVEにあたって取り組んだことの記録であり、研究ノートは、授業で取り上げた内容を発展させたものである。ぜひ、ご覧いただきたい。

謝辞

七夕EVEの実施にあたっては、以下の方々にご協力をいただいた。十文字女子大附属幼稚園園長、十文字佑子先生には、保護者向けにご案内を配布すること、園内や幼稚園バスにポスターを掲示することをお認めいただいた。また、当日はイベント会場である教室にもおいでいただいた。心より感謝申し上げます。

また、留学生別科長、大西正行先生には、別科の学生に対してイベント参加を呼びかけることをお認めいただいた。お忙しいところご対応いただいたことも含めて、改めて感謝申し上げます。小笠原典子先生には、日本語授業をなさる先生方に参加を呼びかけていただいた。感謝申し上げます。

最後に、多くの方々のご協力のもと、本イベントが成功したことを記し、様々にご協力くださった教職員の方々にお礼申し上げます。

資料1 七夕イベント連携企画

留学生の日本語【中国における七夕】 担当：星野祐子

6月28日金曜日 1時間目実施

★留学生に出身地の七夕について発表してもらいました。たとえば、江蘇省では、5月5日に手首に色の紐をかけ、2か月後の7月7日、その紐を屋根に向かって投げます。紐を、牽牛と織女が出逢うための橋に見立てるのです。また、山東省では、7人の未婚の女性が集まり大量の餃子を作ります。その一部を「なつめ」入りの餃子に。「なつめ」は中国語ではzaoと発音。「早」の発音と近いことから、「なつめ」入りを食べた女性は、結婚が早いそうです。...とこんな伝統行事以外にも「花屋にバラが並ぶ」「デートする日」「恋人にディナーに連れて行ってもらえる日」など、今風の意見も飛び出しました。



エッセイ入門【七夕のエッセイ】 担当：小林実

7月1日月曜日 4時間目実施

★七夕にちなんだエッセイを、各自自由に書きました。読者の注意を引くために、最初の一文に力を入れることを心がけてもらっています。このところ雨の日が多い七夕シーズンですが、そこを逆にとった、「彦星と織姫はとっくに別れてるのでは」という発想は、なかなかユニーク。「七夕といえば」という短い作品は、「今年の七夕は、冷やし中華を食べる。」という結句が絶妙な抜け方なので、最高評価をつけました。短冊に「しょう油一生分」と書いた人は、子供のころ醤油が好き過ぎて、自分が醤油になりたかったのだそうです。



民俗文化論【年中行事・たなばたの話】 担当：武田比呂男

7月2日火曜日 3時間目実施

★中国の漢の時代に生まれた牽牛・織女の二星を祭る風習が、日本に古来からあった水辺の神迎えの風習である棚機つ女（たなばたつめ）の伝承に習合し、日本独特の七夕（たなばた）行事が形成されました。

授業ではその過程を概観し、また、宮中行事として展開した七夕と、農耕儀礼や祓禊と結びついた民間の七夕の違いなどを説明、あわせて中国伝来の乞巧奠（きこうでん）が宮中行事として定着し、それを今に伝える冷泉家の乞巧奠の様子を映像資料で確認しました。



総合演習【江戸の浮世絵における七夕】 担当：東聖子



7月3日水曜日 3時間目実施

★<歳時記における七夕> 初めに、『大歳時記』の七夕を読みながら、世界の星物語に思いをはせて、中国の故事、日本の宮中行事、近世俳諧の四季の詞を学びました。七夕関連のことば「天の川・銀河・星合・二星・願いの糸・乞巧奠・梶の葉…」他を知りました。

★<浮世絵における七夕の研究> 七夕の概要を知ったうえで、学生ひとり2・3冊の浮世絵画集を担当してリサーチして、春信・歌麿・政信・広重・北斎・国芳・芳年等の七夕絵を見つけて、鑑賞しました。

＊ ＊学生と掲示物を作成して、図書館の1Fに展示致しました。

「総合演習」【平安時代の七夕と和歌】 担当:赤間恵都子

7月5日金曜日3時間目実施

★最初に古代の七夕行事について学んだ後、平安時代の文学に七夕がどのように現れるかを見ていきました。七夕の記事は、物語などの散文作品には意外に少なく、源氏物語にもわずか2例しかありません。一方、漢詩や和歌の韻文には膨大な数の七夕の歌が残っており、それは年中行事として七夕の日に歌が詠まれていたことによります。授業では、それらの中から二十首ほどの和歌を鑑賞し、最後に各自が気に入った和歌を短冊に書いて、笹に結びつけました。



「オーラルコミュニケーション」

【英語で七夕の朗読劇作成】 担当:シーラ・クリフ



7月5日金曜日3時間目実施

★英語の授業においても、七夕を取り入れた活動を実施。皆の知っている七夕の物語を英語で表現しました。彦星、織姫、織姫の父、ナレーター……。役割を決め、皆で台本を考えます。辞書を引きながら、なんとか物語を完成させました。教員のチェックの後、実際に演じてみることに！浴衣を着ての発表は、いつもと違って、とても新鮮だったようです。

